情報空間論

―― 経済価値の多様化に関連して ――

関　惠司

目　次

1．はじめに
2．脱工業化社会
3．情報行動について――言語と映像――
4．ものばなれ――脱イデー――
5．おわりに

1　はじめに

現在は，社会経済の大変革の時代といわれているが，それは，たとえば指標としてのＧＮＰの増大ということであり，超高速輸送機関の発達ということであり，私企業と公共部門とを問わず巨大組織の定着ということであり，さらにまた大量消費経済の成立ということである。

それはひとくちにいうならば高度工業社会の出現ということである。それに対応して現在はまた文化的変容の時代であるともいわれている。その指標は，たとえばイデオロギーの終焉であり，知的水準全体の上昇であり，情報手段の発達であり，また組織や共同体や家族などの集団規範の多様化と相対比などである。それはひとくちにいえば情報化社会の到来ということである。

そして，これらに対応して個人の価値意識の多元化，行動様式の流動化と役割の多層化，ファッションや性のモラルの変化にみられる感覚の解放等がある。それは過去の人間類型と断ちきれた新しい人間類型の出現ということである。

経済社会的変動――→文化的変容――→人間類型の変化，という作用の流れが，こんにちの社会変動を特徴づけている。そのような変動を示す兆候は60年代後半から相次いでみられた。ビックイベントだけあげても，日米のキャンパス運動がそうであり，チェコ事件がそうであり，アポロ，ベトナム停戦，米中，日中の接近がそうであり，近くはソ連邦の崩壊，中韓の接近もそうである。そしてその恒常的な反映が電波メディア時代，なかでもテレビ文化時代という特色のなかにある。

ところで，社会――→文化――→人間という変動の流れは，こうして成立した人間類型がもう一度経済社会変動と文化変容への入力となったときに，最も大規模な一つの輪となって完結することになる。それが，脱工業化社会の到来を特徴づけることになるであろう。社会的目標としての脱ＧＮＰ，遊びとゆとりの重視，環境汚染問題や資源・人口問題の顕在化，地球規模の，グローバルな発想の必要などがあらわれるのは，現代社会が脱工業化という目標選択の前にあるということの兆候であろう。

2　脱工業化社会

現在のところ，この大規模の環（ループ）はまだけっして完結したとはいえないかも知れないが，その流れが滔々と流れていることを聞きわけることはそれほどむずかしいことではなさそうである。

現在の日本の高速輸送機関による人口の空間移動がどのくらいになるかだけでも考えてみればいい。毎日，新幹線のピストン運動だけで数10万人，航空機でも年間同じ数が流動している。つまりわずか数ヵ月で，日本の総人口が入れ替るほどの規模の人間が，日本列島をビジネスであれ，私的な旅行であれ，不断に流動していることになる。これだけ人間が動きつづけていれば，これだけでも文化が混合し，価値が多元化するのは当然のことかも知れない。

なおそのうえに空間をとびこして伝わる電波メディアという問題がある。人間に文化があることと，ことばをはじめとするメディアがあること

本学兼任講師

は，同じことの表裏であり，一体である。ただしメディアのなかでも電波メディアは特異といってもいい。『人間拡張の原理—メディアの理解』に述べてあるマクルーハンのようにいえば，電波メディアとくにテレビが現在のように普及しなければ現代文化はかえって不具なのだということもできる。実際，このメディアの即時性，伝達範囲の広さ，だれにも近づける開放性は，流動性と変動性が大きく，知的水準が高く，開かれた社会，という現代のコミュニケーション手段として最適で不可欠なものである。グーテンベルグにはじまる活字メディアが近代社会，つまり工業化社会をつくったとすれば，電波メディアはそれより一桁高い現代社会を成り立たせたのである。と同時に，このメディアは旺盛な浸透力で社会のすみずみにまで浸透して，現代生活の実相に人々を適合させる作用をしている。

わが国でよく知られている価値観に，「修身斉家治国平天下」というのがある。省略して最初の「修身」だけとすればだれでも知っているだろうが，いうまでもなくこれは儒教のものである。

中国という国はとにかくユニークな国であった。人間も多いが国土もぼう洋と広い。考えることもさまざまだろう。中国の一般民衆がどれだけ本気で儒教を信じていたかはまことに疑わしい。現にそれと正反対の現世中心の道教が同時にあらわれている。考えることがバラエティに富んでいたことは事実であろう。そう思うならば，しばらく前の「文化大革命」は，中国人を近代的統一政権のもとで歴史上はじめて単一の思想，つまり価値観のもとに強権的に統合しようとしたできごとだとみることができる。ここでも中国人がどれだけ毛沢東思想に一元化されたかは正確にはいえないが。

しかし離陸期にはどこの国にも多かれ少なかれ同じようなことが起きている。財や知識のストックのかわりに，疑うことを知らない人間の精神的人海戦術が，離陸のための推進機になるほかなかったからである。

日本の場合には，日本人が明治以来儒教的価値観に一元化されたこと，本家の中国人もはるかにおよばないということは思想史家の定説である。『修身斉家治国平天下』のうちの前半は，こんにちのことばでいえば私領域，後半は公領域，に関するものである。家という字の意味は厳密にいえば中国と日本とでは違うだろうが，日本の家族制度に合わせて解釈されたことはいうまでもない。そして要するにこのキャッチフレーズの意味は，個人→家→国→天下が4つの同心円をなすのだというように解釈されたのである。

少なくとも独立した私領域をもつ個人が基本になり，それが契約によって別な公的な領域を作るという社会契約説的な文化のなかの価値観とはたいへんなちがいがあることがわかる。そしてこれが，日本社会の離陸から成熟期へかけての人間を動員する価値観であり，日本文化の主調となっていた。

文化というものは，社会を，人間関係を，なめらかに動かすためのソフトウェアだ，というのが筆者の見地であるが，前述のような価値観が非常に強くて，個人生活から社会生活までを「くし刺し」にしているところでは，とてもソフトウェアだというような余裕のある見方はできない。1つしかないもの，代替案の用意されていないものは神の声に近いのである。

かつて昭和20年代に，左翼からの「くし刺し理論」ということがいわれたことがある。居住地の人民闘争から地方権力→中央権力と権力をくし刺しにしていくという発想である。なんとなく『修身斉家……』と裏はらのような感じがする。これだけのことで断定をするつもりはないが，同じような価値観は当時の左翼思想にも影をおとしていたのかも知れない。（丸山真男「日本の思想」参照）つまり，文化価値というものには，政治上の右か左かというベクトルには関係のない精神構造もふくまれているらしい。

ところで戦前からのいろいろな世代をふくむ日本人にとっての戦後史とは，ひとことで要約するとすれば，前述のような価値観に対する間断ない打撃，いわばドンデン返しの連続だったのではないだろうか。

最初のそれが1945年8月15日であったとすると，最近のそれはチェリノブエリの原子力災害や中東湾岸戦争，ソ連邦の崩壊だったのではないだろうか。最初のものには日本人全体が立ち合った。しかし後者にもまた日本人全体が立ち合った。どちらも大事件だったのである。しかしその立ち合い方のなんと異なっていることだろう。い

うまでもないことだが，前者には文字どおり日本人が老いも若きも身をもって立ち合うことを余儀なくされた。

一方，後者のほうはやはり老いも若きもつき合ったのであるけれども，それはブラウン管のうえで，まるでこれらのイベントをモニターするように立ち合ったのである。

立ち合った人口の数も前者と後者ではほとんど変わらない。また立ち合ったことによる感情ないし精神的打撃の総量も，けっして後者が劣っていたとはいえないであろう。なんといっても決定的にめだつのはその立ち合い方の相異なのである。

3　情報行動について—言語と映像—

既述のように人間の経験のあり方が変わってしまったことは依然として事実なのである。かって加藤秀俊氏はその著『情報行動』のなかで現代社会を，経験の百貨店であるとたとえている。それがたしかにあたっている比喩であるのも，これらのイベントの場合が代表しているように，そこにテレビという映像電送が存在しているからである。メディアの発達がどれほど大きかったかをあらためて知ることができよう。はじめに述べた経済社会変動——→文化変容——→人間の変化というループのなかでのメディアの作用，あるいは位置をあらためて考えてみる。

テレビは現代のマスコミの代表的なものである。テレビの特徴としてあげられるものに，同時性とか即時性といわれるものがある。これらについてはいまさら説明の必要はないともいえる。しかし衛星中継が実用化されて以来，この特性についてはあらためてまざまざと思い知らされた。まえにあげた中東湾岸戦争やソ連邦の崩壊などの歴史的事件に立ち会った，立ち会い方のおどろくべき相違というのは，要するにそれらがテレビ・イベントであることからきているといっていい。チェリノブイリ原子力災害もハリケーン，アンドリュー災害もまた，まさしくそうなのである。かってライシャワーが駐日大使であったころ，工業化の影響を視覚化するために世界地図を各国のＧＮＰによってデフォルメした地球図を発表したことがあった。アメリカ大陸の北半分，ヨーロッパ大陸の北半分が大きく，アフリカ，アジアが極端に小さく縮し，そのなかで日本だけがまた異様に大きいというおもしろい地球図であった。

同じような地図をいま情報の到達時間を距離としてデフォルメして描いたらどういうことになるであろうか。アメリカ，日本などが最もコンパクトで，ユーロビジョン諸国がそれにつぎ，インテルサットに加盟した北京と日本が北京とモスクワよりもはるかに近いというような，別の意味でおもしろい地図が描けることだろう。とにかく情報の伝達時間に関する限り，地球上の距離は非常に短縮した。環境，資源問題がクローズアップされて，地球を一つのエコロジーシステムとして考える着眼の重要性が強く指摘されている。こういう発想がリアリティをもちうるとしたら，それはこういう衛星通信網の発達におうところが大きいのではないか。もっとも衛星通信はテレビだけのものではないが，テレビはそれをいちだんと大衆に近づける。もっとも実際の人間の海外移動もそれに比例して大きくなっていることもみおとせないと思うが。

ついでながら，古来から情報が１日で到達できる範囲を人間はコミュニティと考えてきた。

テレビには伝達範囲または受信可能範囲が大きいという特徴もある。これもいまさら説明の要はないであろう。それは１％で数10万人に相当するメディアなのである。

この数値について一つ興味ある問題が考えられる。

通常マスコミ理論では，テレビの特徴として娯楽性の強さという点を指摘することになっていた。現にこういう偏見（？）を支持しているものも多いかも知れない。

ところでさきほど来のテレビ・イベントはいずれも70％とか80％，90％とかいった高い視聴率を記録している。これらは，いわゆるテレビの娯楽性のなせる業なのであろうか。しかし立ち会った事件の重要性，得られた体験の質からいって，それを従来の報道，教養と対比された意味での娯楽ということには大きな疑問がのこる。一方それを報道番組ということは，常識的に賛成が一番得やすいであろう。しかしこんどはその異常といっていいほど高い視聴率を説明することがむずかしくなる。（一例として報道番組の代表的なものであるＮＨＫ７時のニュースの視聴率は通常約20％である）

こういう数字はいったいなにを示していると考えるべきであろうか。結論的にいえばテレビ媒体に報道とか娯楽という区分をつけることがむりになりつつあるのであり，媒体接触態度という側面からいえば，そういう区別が視聴者の態度のなかになくなってきているのである。このことは逆に娯楽番組やCMの視聴態度の側からみてもいえる傾向なのであるが，そういう区別がなくなったものをなんと呼べばよいであろうか。それはおそらく経験である。個体の外界との接触を経験というから，現代の人間は生物的個体としての五感の守備範囲をはるかにこえたメディア，なかでもテレビというメディアによる経験の世界を所有しているわけである。その世界はこの30年の間に，いやこの数年の間におどろくほどひろくなったといえるはずである。加藤秀俊氏が現代は経験の百貨店だというときに，その比喩のなかにはテレビの存在を考え落とすわけにはいかないだろう。いまでは新聞や本を経験の世界からしめ出そうとする人はすくない。しかし同じ意味で，テレビをしめ出すことはそれだけの量の経験をしめ出していることなのである。それはおそらくたいへんな量にのぼるであろう。

外界に接触するという意味での経験に境を接してすぐつづいているのは，経験の整理である。あるいは前者を情報の獲得・受信だとすると，後者は情報の処理であるといっていい。この2つを合わせて経験と呼ぶのだという説もある。もっと極端なものは後者をふくまないものは経験と認めないというものもいる。

これらの説には多分理由がある。それはテレビ以前の時代が主用していた言語，文字といったメディアが情報の処理に適していると考えられてきたからである。

情報ののりものを言語や文字・活字等の言語系と映像系とにわけてみる。おと（音）つまり音楽のような場合があるが，これは後者に準ずると考える。つまりメディアに言語系と映像系とがあることになる。両方とも経験から切りはなせない（つまり人間が経験するとはこれらのソフトウェアを使うということである）が，なかでも前者は情報の処理，いいかえれば考えることに適し，後者は情報を単に獲得することに適している――と一般には考えられている。だがはたしてそうだろうか。その主張にはもっともな面もある。なんといっても言語系は人間が一番ながくつき合ってきたメディアである。考える，思考するときに言語系に照準を合わせるのはむりもない。一方，映像系のほうは写真や映画でいとぐちがひらかれたとはいえ，こんなに普及したのはテレビがあらわれた近々20～30年にすぎない。

しかしもう一度，この説を疑ってみるとどうなるか。たとえば，すぐれたシステム・エンジニアの仕事は大部分適切な工程経路図表（フロー・チャート）を書くことにある，といわれている。それをプログラム言語に書きなおすのは仕事の小さな部分にすぎない，とよくいわれる。かれはフロー・チャートという視覚化された手段を使って「考えた」のではないだろうか。また複雑な事態を直観的にイメージするのは考えたことにならないか。

それらとは別の例で，たとえばわれわれは1972年冬のニクソン訪中を目撃した。そのとき恐らくほとんどのものがある衝撃（ある人には新鮮な，またある人は不快な）を受けたはずである。それは，この衛星中継が事柄に関する意見よりもさきに事実情報を伝えたからである。いいかえれば，言語による理解の範囲をはるかにこえた事実情報を伝えたからである。それによって，たとえば社会主義といった概念を一度洗いなおして，もっとそれをリアルにみなければならないという直観をもたせたという意味で，それはやはり考えることを含んでいたといえるのではないか。

要するに感覚的か思索的かというのは，メディアの性質に本質的に結びついているものではない。それは多分に訓練の産物である。映像的に考える，ということもすでに古くから部分的にはやられてきたことなのである。ただテレビはそれを飛躍的に拡大した。あえていえば言語系にきっ抗し，ときには上回るほどに，である。

映像が思考をにぶらせるというのは，だから多分誤った考えである。むしろそれは経験の世界を飛躍的にひろげたのである。こうして格段にひろがった経験の世界に対して，それを処理するメディアの組み合わせ（メディア・ミックス）が必要とされているのである。それはおそらく，言語系しかなかった時代につくられたイデオロギーという物指しでは，とうていはかりきれないほどのひ

ろがり方であろう。テレビもまた脱イデオロギー化に一役はかっている。

現代社会は情報社会ともいわれている。工業社会は「もの」が不断に流れはじめた社会である。ものの流れが増水した結果，特定の人から特定の人へという流れ（もののコミュニケーション）を考えることは（不可能ではないが）実際的ではなくなった。その結果，その流れ自体を特定の人と人との結合から切りはなしてとらえる発想として「商品」という把握のしかたが必要になった。「情報」というのはその発想に似ている。ちょろちょろと音をたてて流れていた時には，特定の人から特定の人へのメッセージのやりとりを考えていればよかった。しかしその流れがふえ，ある水位をこえはじめたときから，物々交換的なコミュニケーションのモデルを捨てて，流れの総体に着目する「情報」という見方が必要になったのである。

4 ものばなれ—脱イディー—

情報社会とは，情報がたえずわれわれのまわりを空気のようにとりまきながら流れている社会，それによって円滑がたもたれている社会のことである。その大気圏を情報空間と呼ぼう。そのなかには，すでに例としてとりあげてきた衛星中継の場合のように，それ自体従来の固定観念に不意打ちをくわせてしまうようなものもふくまれている。と同時に実にさまざまな特定意見や理念やイデオロギーに染められたものもふくまれている。しかし，それらのありとあらゆる色彩が混じり合ってちょうど白色になってしまうように，そこにあるのはただ相対化された，大気のような情報の流れである。情報はわれわれがそれを手にとった時にのみはじめて意味を付与されるのである。

情報空間は現在の人間の拡大した経験の世界を象徴する。それはそのなかにすでに価値の多元化と脱イデオロギー化を内蔵しているのである。情報をよく「ものばなれ」と形容することがある。たとえば，社会を自然主義的にみるのでなく，システムとしてみるときなどは，社会をものとしてではなく情報としてとらえている。社会をものとしてとらえるのは19世紀の歴史主義の発想などにみられる。それにくらべればシステム的発想は「ものばなれ」しているといっていいのである。

しかし，情報という発想は「ものばなれ」しているだけではなく，特定の理念というものからも「はなれ」ている。脱イディーということが，情報社会の特色である。情報という発想がそれを象徴しているのである。

5 おわりに

われわれはこのような情報化された世界と接触する場合にイデオロギーや固定した観念をもちだすと，宇宙を天動説に立ってみるような結果をまねきかねない。文化のなかの価値観の多元化は，時に非難されるような病理現象なのではなく，現代生活を集約した情報空間とつき合うための準備行動のようなものであろう。このような高密度の情報空間が，高い生産性，高い流動性，そして大きな変動性を備えた現代社会に人間が適応し，それをマスターするための文化の場が用意されていると考えるのである。

参考文献

1） 現代社会の社会学的諸相．坂田義教編，文化書房博文社．
2） 現代社会病理論．大薮寿寿一著，幻想社．
3） 社会学—理論・学史・問題．佐々木光他編，税務経理協会．
4） 現代社会論．戸谷修他編，税務経理協会．